

2 1 世紀

2 1 世紀

市川治療室 No.117/2001.01

2 1 世紀の初めの年に最近の心構えを思い起こしてみました。
(1 9 8 6 年からではスペース不足ですから過去 3 年にしました)

『科学・哲学と健康管理』・・・三石巖先生の著書から No.87/1998.01

科学者とは素朴に考えれば「真理を愛する人」
哲学者とは語源的に見れば「思索（道筋を立てて深く考える）を愛する人」を言う。

心理を愛するのが科学だということは前にも書いた。
逆に言えば、科学を知らなければ真理を愛することは出来ないのである。

科学はごまかしが聞かない。身体の問題、健康の問題はごまかしがきかない。
それは科学の問題だからである。

科学書や哲学書を読もう。それが大脳新皮質を鍛える最高の方法だ。

鍛錬されていない脳には、利害の判断は出来ても真偽の判断は出来ない。
真偽の判断の出来ない脳は容易に二セモノに引っかかる。

本当の意味で「考える」というのは、選択ではなくて論理過程のことである。
論理とは、きちんと定義された言葉を、緊張関係をたどって繋いでゆくことだ。
これに対して「選択」は一般に「どちらが有利か」という基準に従って行われる。

『化学と健康管理』・・・養老孟（ヨウロウ・タケシ）氏の講演から No.95/1999.01

科学をする人は、なぜ、どうして、と考えている。
・・・人間は「なぜ」と思ってもすぐに忘れちゃう。
あるいは、適当な説明を聞いて納得しちゃう。
これじゃだめで、自分の頭にずーっと持っておくのが大事だと思います。

不思議だなと思ったことは、ちゃんとした答えが出るまでその質問を
ずっと忘れないで下さい。その答えが出ると、ものすごく嬉しい。

科学の一番の良いところは、いったんその味を覚えたら忘れないということです。
答が分かった時の面白さ、それが発見であるわけです。

科学は自分が納得するかしないかであって、誰だって出来る。
発見は、周りの人が大事に思うかどうかではなく、自分にとって大事なら嬉しいんです。

『科学とは』・・・立花隆氏の著書から No.106/2000.01

サイエンスとはもともと何かと言えば、ラテン語の *s c i e n t i a* で知識そのものを意味している。

s c i e n t i a は、*s c i o*（知る）の名詞形であり、サイエンスとは、本来、知ること全体、知識の総体を指しているのである。

・・・科学というものは、本来面白いものである。
分かれば、こんな面白いものはない。何がどうなっているかを知りたいというのは、人間が生まれながらに持っている、どうしようもない本性であって、その本性につき動かされてでき上がった物が、科学という知の全体像なのだから、これが面白くなかろうはずはないのである。

もちろんわからなければ面白くないし、わからないものをわからなくても良いからとにかく覚えろと言うようなプレッシャーをかけられたら（一貫してそれをやってきたのが日本の科学教育ならぬ理科教育だった）、面白かろうはずがない。

私は、ヴィトゲンシュタインの「語りうるものは全て明晰に語りうる」という言葉の信奉者で自分の特性は、難しいことを分かりやすくかたることにあると思って、この仕事を続けてきた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

三石先生や養老氏、立花氏と同じ科学的な思考回路に基づいた立場から今年も考えることに値する健康管理・回復の情報をお伝えしたいと考えています。
